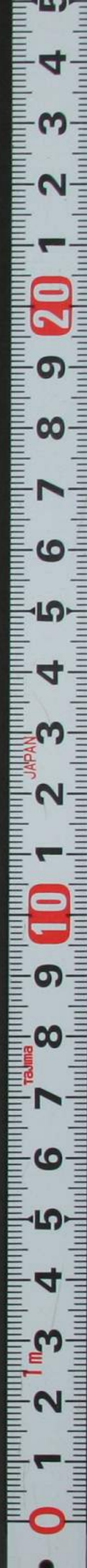


淀屋形金雞新話

後編

卷

特別
13
3521
8



門 13
3521
8

出前

月

日

深淵の淵

昭和二十九年七月九日購



立雞新話卷之八

滝郎苦悶圖

東武岳亭主人



滝五郎み従ひ行くと大勢の幫間ども慌て忙れたるに
廊中へ斯と告ぐと曲輪の者どもたのふ女馬を早送す
戸屋へも知らせたるふぞ井戸屋の渾家も駭れたるに
居へ斯と告ぐは小滝右エ門是を告ぐてこれをもた何なる
そやと或の狼狽或の怒り頓て神寄へ人をやりて揚屋のま
人をよびて梓の顛末を問ふと揚屋のちかど答へて曰く
是皆老頭の道ハぬの分付ふようて方般やう小把計なり

立雞新話卷之八

書

侍よまうと答へるもぞ滝多ゆんたの小奴ぢり立地小道八を
よびてはまをれけり小道八一言かひくももるくさ
俯臥て関口は滝多ゆんたの道八が一宗をよびて是木の始末
を云はせ道八を預けたる小一宗の者の是をきてたのふ驚
たるるる奈何との詮術をく道八を引受の詮文をうたて滝
多ゆんたのけり道八のまなくと一宗の者小引さるさうち
連立て出行たり是の備ち卯木佐和弥大の滝五郎を引立
かへり縣令の白破の上小引さる佐和弥大自ら願前小進
んで滝五郎小向つて曰く汝奈何の事か無位無官の身とあ
つて冠をさるきは束を著し薬小束を往末居るとの抑何

木の心ふて斯る可畏この爲つるぞやと云々少の滝五郎の唯
泪ふくさつと答て曰さるる小生思ふゆつて幫間小がそ
のうは任せ斯るえせまを爲さる今更後悔し侍入
どの奈何との詮方さる旦小生深く酒と好ま侍へを酔
酩の上ふて致し別小あ一た心ふて爲つるふの有は願ふの縣
今君こそむの罪を免しめひ家小飯さあひる世ふ右難
く侍へと泪と俱み願ひたる佐和弥大増々怒つて曰く
幫間小あそこのらさる酒自たの上小て薬小のり白魚茹と著
しこもがごと然るそ甘た仁免はとたの又け後さる薬小のり白
衣服を著したる者あつて酒狂のう入ふて侍つて答るるは是を

も尚免さんや一の万物のちりめ一度免きを百度も免はべ
け後ありて免し難死この今も尚免しが然る汝と免さ
ぬるう左ふ右且休を獄ふらう置もらく木直看はべ死らうと
てまより滝五郎を竟小園固める死る憐むく滝五郎其身然
までの悪きものさく只老頭道はびりめより且の暴酒の魂をぢ思
ひに非常の遊びはして斯る横災を引出漂流の苦きを中事
の兼小狂菜佳味と賦りけん酒の狂乱水おぞ有る

卯木城旧家

井戸屋滝多のんの暫らく隠居の身とらうて引籠りてあり
らるをけねど一子滝五郎甚だ死横災を扯らうて小園の裡

小つまがゆとらうゆと滝多のん再度店ゆゆと支をとらう計
らる豫てよう家の裡小一隻の矮物を飼おれたらうが或夜土
まの頃小のらうてけ矮物あたりみ吼ける小どけき小滝多
めん目を覚め起返りて見てあゆむ矮物の真の方を見つめ
て只音小啼狂りて止は滝多のん弥々のらうく頻て手燈小
火とてらうて矮物の吼ゆらう小従ひて行て見ゆ中蔵
の戸此二一用きらう儲いとわらうた渾家の者を呼あつ
らると死土藏の中より一人の曲者緋布をとりて面とらうせ
身も黒き打扮して長た刀をよらう入千金匣を捨のけ外
面方へめて運ぶ外の方みゆ又人ありて足を受とる形勢らう

滝右エ門是を見てきてとあげて盗賊あり出上りこと叫び
 たり小ぞ渾家の者こそとを咄めて追々小起出て多岐かきこころ
 駈あつまる次血賊も此て〜〜狼狽惚々と思ひけん引抱へ
 ころ千金篋を滝多ゆん小打つけろと物下小八打と當り
 て仰向小動と倒る人々こころと城馬死て滝多ゆんを号り同
 小偷賊の逃出て行方知は成ぬころは盗賊の別人ありは是
 老頭の道八が無頼のめらを加文て斯る西心支のまけろろ
 滝多ゆん千両函ふて物を打とたの小痛くて起あがること
 能は渾家一同より集り菓を腹させ水を吞せ万般とめ
 抱して夜のふのくと明ふる斯て土庫の裡を駈一叩ころ小

僅小二千両を盗まゆと然ればまをとて誹へると一封の
 訟牒をまこめ一人の主管忠作とのける者ゆゆせ既ふりて
 んとほろ死へ外面の方より七八人縣令の下司上意ろりと呼
 りて奥の間小打通り滝多ゆん何処ある疾々のでよと
 呼りけり小ぞ滝多ゆんたの小駈り身の中の疼さを堪へ中心
 作が肩小まごり漸々小這出て下司の前小拜伏は下司
 の者滝多ゆん小謂て曰くは度井戸屋滝五郎市人の身
 として其の衆の罪輕かろはさべて一國一城のあらど天下小名
 の岡えある武士はろ漫り小寒かひ衆が〜〜然るを那ぞや滝
 五郎下主下臈の身を以て冠りを正し装束を著し雲

小打乗て往来せし言ハ返逆人同前あり是を重くは
 時ハ急ち頭ハあへんは原末酒在りて死るるは
 卯木との只官隣とありは滝五郎が命を助け難波の御を
 追放し斯て井戸屋の家藏賊宝の没収せしめり
 是の縣令大滝左門の佐どの代官と卯木佐和弥太と
 のより言ハ渡さる死るる汝亦早く支度をととのへは家
 を出まへと云渡しける小ぞ然ぬぞ小身の疼まふと平
 等やむは滝多ゆんは支を閉て忙し感ひ腰打ぬりて
 一寸も動き得は唯あつとて涙ふりて討りて下司
 の小吏りの只官小通とて疾くまよと追とて多ゆと御

小佐和弥大小仗とて死る忠ハが身忠作といふ者元来
 け家小給まして有しが忠ハ小劣らぬ忠義のゆゑにけ
 時主人滝多ゆんが疼りて体を見て頓て滝多ゆんを背小
 おひて外面小いで豫て井戸屋へ出入さる轎見夫の家小の
 つと乗轎一挺を仕立させ是小滝多ゆんを打乗しり中心作が
 古御淀川のあり八幡山の禁下の村へぞ伴ひ行々其外奴
 子婢女丁推らの追立ちり小駭死怖也皆門前小走りて
 おのがさる親御へ返りまぬ却て説け日卯木佐和弥大ハ
 滝五郎を廳前小引出謂て曰く你賤し死身をり看見え
 衣冠を正し其小の貴人の前をの憚らば歩行の宜定



金盗物語 卷之八

八

小返逆同前のあまの抑甚だ死罪ありかゝ然を汝を重
 き刑罰小行ふべし死罪もども元来酒狂ひて爲つる身と陳
 びるをめて罪の疑ひ死の軽くせよと古人の詞小まひ罪一等
 を和けて井戸屋の家財を残るは没収然して汝が命を助
 け難速の浦を追放はるる何死へるるとも疾々出去べし
 と云渡し滝五郎が縛縄をゆるし門前よりおの拂ひをゆるし
 を滝五郎の忙然として行儀今の家をも没収せしめ飯
 べし死めまゝ然を斯汚し死女小て二宗の家めも行か
 奈何のせんと泪小くして群をうらゝ一隻の雁轍の鮎の雨
 とらふ光景小て夕時猶豫居るけり斯る死へ奴二人乗

輪ぶ死走りまゝ滝五郎を見て打喜び跪居て三ヶ
 ろやう今朝のふと縣令より井戸屋の家庫を没収せら
 れ父君もけ里を追拂ひてあひまひ忠作が御供して古
 御八もへ伴ひ赤くせ侍めりや郎君ゆの極めて今日追
 放せしめあまべしと疾々赤く御供して飯をうと忠
 作が言ひ付ふ任せ御迎小赤く死小今爰小て御目小
 かゝる悪る死御顔を拜しまわらせ候ふのこも死五口們が
 喜恰る疾乗輪めさし侍へと信り小云々もど滝五郎
 初めて生くる心地とらう黄泉の国小て御佛小逢つる思ひ小
 世々上喜恰の眉とひり種々と物ごとひつゝ頓て乗輪

ふのりけしむが奴子們の事を見揚て八幡をさうて急ぎごころ
御ふ井戸屋へ向ひらる七八人の下司どもの滝をわん木を
放ち斯て逐件土庫をおひひらけた若干の金浪を把ひ
舟ふつこ車に乗て追て縣令の廳へ運ばせ雜具調度家
庫のこころに其儘に賣拂ひ金浪のこ縣令の鼓小運させ
る然いどの余り小多き金浪をこが官府の宝藏に納まると
難く詮術をくつて納屋をまうひて是に納おれた昼夜番主
をぞ付おれたる斯る方々の金浪をこが佐和弥大も二十兩
余りを掠めとつて門外より酒店丹八といへる者の家へ密に
預けて匿しおれたる

大滝戒卯木

大滝左門の佐の將軍の命を受けて近江の国へ出陣し日ごと
て賊徒を責むる洛陽へ歸りて將軍の一邊におありて政
吏を執行ひて在るがけ頃人の噂をきき浪速の井戸屋
庵五郎と云ふ小乗る罪におうて浪速を追放せしめ家居
に没収せしめんと専ら云ひてをやくるを左門の佐是を
聞て大いにお驚死に備へ一大吏より佐和弥大、吾も告げ
て然ることを爲べに詔せらるる然に左まを右まを我々
本国におありが極めて分かち難き要吏こそ多うめと
早卒にお思ひ立て將軍小暫時御假間をとまわらせ立地

小洛階を登早して浪華をさしてとて帰るる次の日の昼の
 頃小浪速の鼓ふ鼓うつれ急小佐和弥大を呼びよせて井
 戸屋の吏を訊問する小佐和弥大答へて云やう彼清五郎
 其身市人小て有るがう金冠といふに樂小乗白宦衣を着又
 の装束を著して往来して侍人故重死刑罪小も行ふ
 き処をいふも吾君御・值行の吏をいひ罪一等を和めて家
 を没収し彼等の追放小行ひ侍ひぬと語りくは左門の
 佐大の小佐和弥大を吃つて曰く价奈何をいひ然僻吏を
 事しつるぞや吾初め汝小言し吏あり小吏をいふが汝がこころ
 の仔細いふべし大吏の採おいて我歸りを待べしと云ふ小罪は

や然るもの一大吏を吾小問合せもせはして汝一箇のいをも
 て斯る暴政に行ひしぞ井戸屋の原末旧家小して將軍よ
 りの給のの君く尊謁をもさしつる身小て市人小てそわん
 汝小よつても尊死身ろつ旦又今日帰る路小て神ざたの廊
 中の者小あひて問はつる小彼清五郎が乗るる雲の祭礼
 の神雲小て装束の則ち狂言小用ふる處の物ろつる然に
 此の清五郎の祭りのわろ物小使りてさるゆへにハム家堂上
 の真似をさる小非に却つて是れ七食をさる小真似をさる
 る小當田さる然に往來を騒がせし罪のさるゆへに唯叱りあつ
 討りふして是足るとは家を没収し追放する汝が罪却つて

車あひ然さと政せい支しを司つかさどらる者もの一度極きまめらるる今又迹あとへハ疾はやし難がた
 死し謂い倫りん言げん汗あせのどく出て返かへらばといはままらうらう汝なんぢ御ご向むかのト
 吾われ妻つま屋やダ古ふる井いを穿うちて妻つま之の黄きん白びやくを夫おとこハ井い戸こ屋やに
 ぬのんの甘あま古ふる井いを穿うちて若わが子この番ばん金かねをそらり汝なんぢ甘あま大おほ言ご又
 を恨うらまふ思おもひて井い戸こ屋やへ仇あだをとらうらるる言ご能よくせとせと知し
 とくろまう一端いつたん万福まんぷく上人じゆんじんより頼たのまふと矢やああくせらるる義ぎを思おも
 ひて你みづかを重おもく用もちひらるる生なま屋やの我わが過あやちちて今更いまさら更さらまふ悔く
 とのいども覆かぶ水みづ尚なほ盆ぼん返かへらば汝なんぢけのち吾われ看み邊へらるる疾やま
 々々退ひきと叱なぐらむらるる小こぞ佐和弥太さわやたいハ一言いちごん半はん勺しやくのひらたむ
 るる黙もく然ぜんとて退ひききらるる次つぎの日左門にちざもんの佐一封さいつふの書しよ目めまきき

ぬ佐和弥太さわやたい小こゆめせ若わが黨とう二人ふたり小こ送おくらせて南都なんとの万福
 上人じゆんじんの許もとへ断ことわりいひてぞ返かへさるる佐和弥太さわやたいハ彼かの黄わう金きん籠ろう
 を密ひそか取出とりて門外かどの酒樓丹しゆろうたんハ家いえ小こ預あかけおた定さだま知し
 ぬ顔かほとて若わが黨とうら小こ送おくらるる南都なんとの方かたへ返かへらるる然しかとて后のち
 左門さもんの佐彼井戸屋さべいどやよう運たきびびるる金浪きんろうを木き直ち勘かん見けん王わうの小こ
 室むろ是こゝ小こおびびらるるきまゆゆと衛舎ゑいしやの室むろ藏ざう小こ納なあある新あら
 ら小納屋こなやを造つくらて納なああらるる小こぞ左門さもんの佐忙さまじ小こ帽ぼう
 をおのひたや井戸屋いどやが賊室さくむろかくまで野の蓄たくああらるるへとの
 極きまめて彼かの滝たき五郎ごろうら今いまのやど何なん死しふふありて夏なつ小こ沈しづま
 て在あらるる我われ遠とほくは津つ本ほん木きを呼よび出でる原はらの女むすめ小こ立たちち

らまは黄白財宝を返し付与違ひはぐとこの底小思ひ
あの時節を待てぞ居らむとる

吾妻哭薄命

忠作の吾古御八幡山の葎の里小月ゆる軒の荒破屋小
滝五郎親工を忍かせおれ其身の日毎駈まらうて米を
買其薪をりため二人を養ひ矢あせせらる滝五郎の夢と計
り昨日の大愷引かへて今日顔回が一簞の食をささへ
き身とらうて唯忠作が忠義小らうて僅小命まつるぐの
只言歎死小沈まける其上小父滝五郎のいまる夜道ハ小千
両笹を打つけける其後よう胸のこもて食度ささる小咽を

こまは日日夜夜へ疲る小ぞ滝五郎の泪小く砂と吾一端の
過去よう斯る大度を出し父君小も歎きをうけ吾も
貧し死憂目小あひ生てあぶ死甲斐るるれど父君の在せる
間の逆さるの歎きをかけ不孝の罪を重んよう今此百憂を
堪へ親人の病煩を心あくまで愛りまわらせ備けの寿命う
かり有て黄泉の客ともうありが吾も僕共自害しく死
出三途を伴ふべと忠作小いそよ云は心の中小思ひ定め泪
を忍びて居らうとる愛小又神ざれの曲痛まる茨木屋の吾
妻のころが夫と頼むべ死滝五郎思とる禍ひよう久く固
固小つらうとるが竟小の難速を速放せし家をも没収

せしめしとてみて平天小敷死悲しと泪の海ふとひつと花の
 山ふよう添て榎と打や居るうがは頃人の噂と夢み小庵五
 郎ハ八幡のふとち小庵住居して一日の煙くも立ちぬめる光景
 ろつと吹まふびて吾妻のたの小敷驚きつ吾身の從良の海こ
 る身ふと小庵君の妻小相違ふと夫の噂と暮るあふと
 安閑と外ふありて知どがうして居た女の探さる離傳
 へたて中華ふり明の陳寿とちや云くる人の妻いその親
 の二五号して置つるまあ嫁せざる其たさた小陳寿思き
 病ひふやしを女の親是を忍んで縁を断んと云くるを女の
 是と兼引ば一度縁とをうめると上を死るまで五口まうりま

の悪き病と吹バ立地小赤うてみ抱まぐ一奈何ぞ縁を
 断ころへと夫より夫の家居小行て悪死病のみ抱て縁を
 年とち経ころや妾も今より彼死小行て滝君小丹死仕
 へ舅御小も孝行つと御み抱を鳥にげ然ぞくと摺
 り言やがて主人の長が前小出てニヤうけ程とち小安めつ
 小バ滝君ハ八幡のふとち小庵住居めみとゆめ妻の去る日
 從良のと冊ころ身小あさなが今より滝君の御傍へ参り御
 み抱のこほづく思ふもう実御決絶と給り侍へとニヤ々のバ
 廿次の長とち死御向の日從良の冊とち河更といふつとや
 你が更ハ老頭の道ハが手より三百兩の證金を受とちその

金葉新言卷六

三

残さる五百兩の今おめて来らざむば身你が落籍のまがこの冊
 依然を决絶の遣がごとと云けるのぞ五吾妻のゆめて世の惑
 ひそのまる日滝君の妾が身の代十兩を道八小付与さうと
 曰ひのが借の道八滝君を欺死まわせ妾が身の代の皆の皆
 とり込て御主人への進せざらしと買えさぶり借さしく醜
 した悪人ぞやと発さと泪を流し撞とみて泣居さらしと
 妾時ありて顔をめしけ又云やう妾が落籍のまがこの冊はと
 曰ひのうらしの詮術を今よう何時までらうと勤めを殺し侍う
 るん然に代つら小の身の代の證金三百兩を妾小返し玉り侍
 へ滝君へ贈り進せけらぶの貧苦を返さし進せし侍る

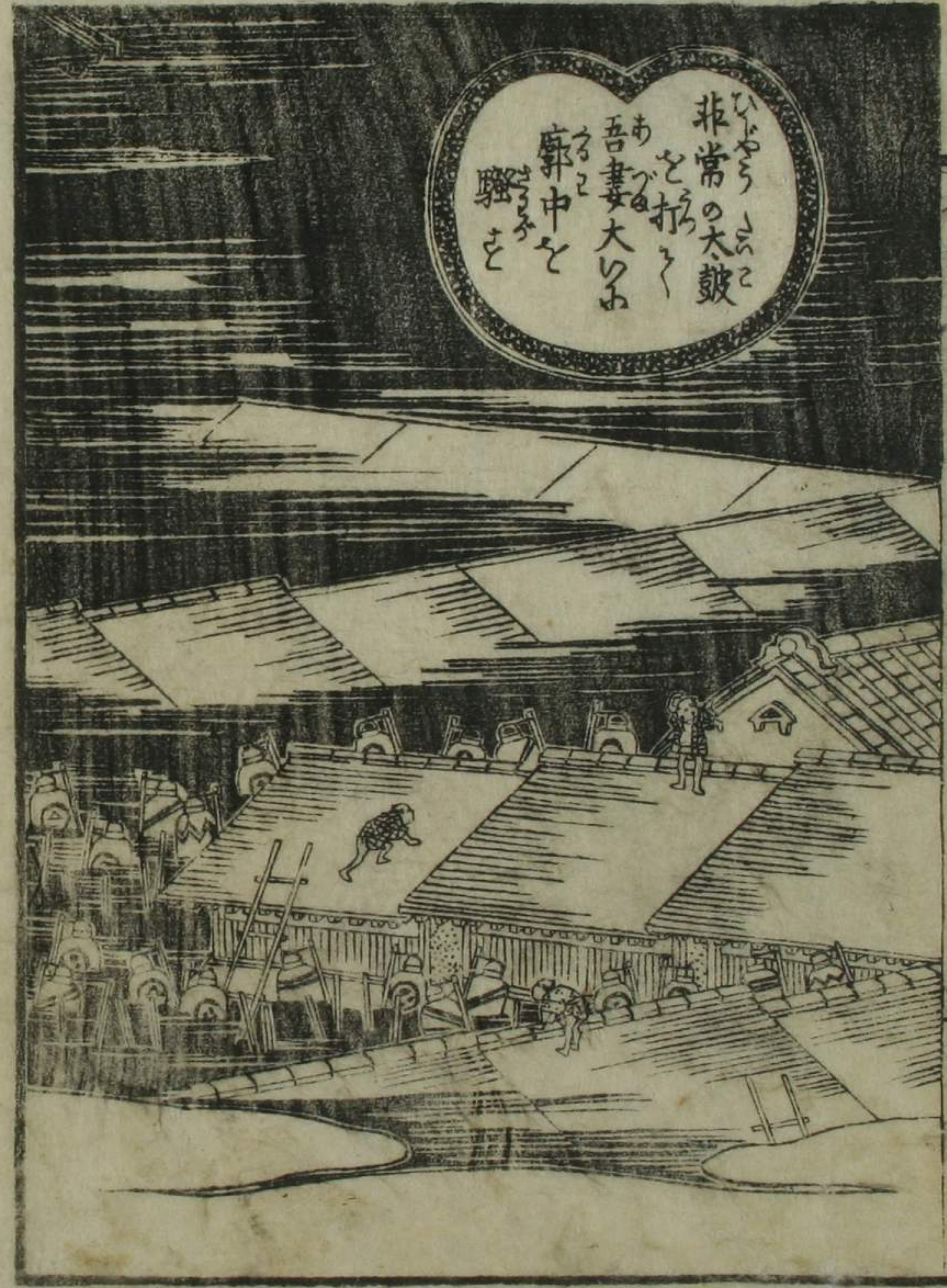
ろうと工々とびサ次の長谷へての夫も又恨つぬまらう都て
 落籍の證金の購出さぬ其時の返さぬが廊中の法らう
 其上はるど都方の武士小て你を購出さんと曰ひ人あり
 原未昔の金のこの玉のは然に今宵の玉まで小の商議に
 云やう小整ひて你の從良せらうと云ふ其心付し侍玉
 へこニ云ける小の五吾妻の再度さしを答て勿心ち滝のことく泪
 を流し彼方へ八打と倒れしう半時をかうはみぬう暫くあ
 っと起上らし然に妾の臥室小ありて從良せらうと待たる
 りんと云つて立て雨沾とと真の一室へ退れたらう

五妻駭曲輪



金葉新言卷之八

八



いんやうよこ
非常の大鼓
を打く
あづま
吾妻大い
麻中を
騒を

金葉新言卷之八

五

廿六
廿六木屋の長がニ一都方の武士ふて吾妻を及洛借せんと
曰ふ人ありとニ一其都方の人の誰る人と思ひし是則ち
卯木佐和弥太ろう一度南都へ送りし行しが勿心ち上人の
御許を逐電して原の難波ふまり彼丹八が家小預けし
にける昔金の難と若干の金銀をとりし斯て神さた小
到り廿六が許み行て吾妻を及洛借せんとひけふふぞ欲深
き花街人のろひひて廿六の長もたのみ喜怡さるる吾妻
を佐和弥太が許へ送りまくの黄金を得んものこ百銀
高議をまふろく吾妻のけをてめてたの小悲しくこ太何
薄命るゆびとて斯まて夏目と重ゆるこの神も仏もあそ

さぬまら救心らの身の生あるかふ斯る夏目も見ろつけい
不まきくバ自害して迷途ふままた父母の尊傍へとく
糸く孝行を尽さばや然ろくくと點頭つ勿心ち刺りちり
い咽下小あああて既小伐人とまろりしか又熟ちとお
ゆやう連も死べれ命ろ一度は家を逃のびて滝君み逢ま
あせ問とと言と語り合て然して后死するとも又更の邊
かくと刺刀の且と納め左右ふても奈何してけ家を後
出んと東さる西さる考うかけ廿六が家の一箇の櫓
あうけ櫓の上小大のうろ太鼓と釣おれ劍峰盗人木火の難
る有らたけは太鼓と打鳴して曲中の人をあらむ原こ

此非常の要害より吾妻の風と是れは付この大鼓を
 打とれたの異変ありと心得て廊中の者ども騒動まじり
 騒ぎぬ打まじりたはては廊中を抜出んの何よう安んじ
 くと勿心ちぬ思ひつた禰禰も著も脱ぎて櫛かんざし
 皆とら捨根結めんと扱え伐て黒髪四方へり乱し赤麻衣の
 小袖のいろと著て細死帯を堅く結び楼上の裡方の圓
 窓より竹の格子をお破り屏風をそこ爰引やがうて様
 子の代りと踏しめつ漸々窓より潜り出屋頭づゝい小行
 んとほろふ時々も寒風肌へをとり霜の尾小満るゝ
 手へ寒え身のうづい足の今と切らうと一歩歩ての霜小

ころ二寸往ての跪下り度々落人とほろを楼上の格子小とら
 つれて思ふ念心力厳をもと下は女の一念爰ぞと思ひ
 つ足と踏しめく辛うじて櫛小近づれたのうろろ格子の
 間を漸々ぬらうと入手まさごう小様木小とりつた一息
 ろろと継らうと時殺つての悪あぐるんと覺えぬ手頭
 小息あけうけ様子をかきめ櫛牽のりう小難るゝ櫛
 みのりう迫星明りぬ櫛あうら彼太鼓を打らうし動
 々と御言けはば廊中の者どもは太鼓をきつつけて
 驚破異こそ起つらぬと出背のこと呼らう家家の
 若者ども門々の老若男女手小手小提灯とみつら

ね星のごとく小入乱れ強のごとく小行遠ひまの何死に何
 ぞと彼方へ馳のたけ方へ走り騷動たつとさうさうなり
 け櫓の太鼓者の男太のふ狼狽さてる吾鼓へき役つら
 小何んら打るんと獨言と櫓ののりつ小吾妻の忽ち
 足音響て下より人の登るをささとり櫓を彼方へ投して
 搦子を下んとはる死へ櫓の着主さうつと登り色目死女
 児の黒髪四方へ振るうてま居る吾妻が次女を見ろ
 ようも幽霊さうや思ひん発と一匙駭死叫び搦木を
 岸波と踏外して櫓の上より挫と落其俛息とえ死ゆけ
 吾妻の斯とも心つらば搦子みとりつた慄ひく一足さぐ

つ小歩びつ難く下ふをう終りて彼櫓をんが家の軒小
 古た木綿の縹絆ありしを引をぐして頭みうう狼狽さ
 ぐたせの人の中を潜りぬけく漸々大門を走り出さ友
 て又一息つた熟くとおのへやう斯廓中をが抜いでさゆども
 道遙る八幡まで夜をさうてい行ごう奈何のせんと猶豫
 つ女時々びと居るううう愛ぬ相山古仙のけ夜廓中
 存び居るううが何ん知だ騷動おらう上を下へと返らる
 小ぞ存びの奥も尺くまで斯てい更ふ面白くは不き家小
 故くまうと小提灯を手ふさげて大門を出て急たたる時
 後より女のきめて相山ううと呼のあり古仙あやうと振

返り見しう小汚気う濡汗とくづり髪打そせし女まう初め
 て逃へとまじし女再度まうけて吾妻めて侍ふぞや助けて
 べと云々う小ぞ古仙おどろけ引返し提灯さしよせ能く
 少しが実小吾妻小て有るう小ぞ太不審きて回々や抑火示
 何る仔細小て斯る女小てまうくぞと訊ぬ少し吾妻泣る
 答へて云やう流の長欲小けりて滝君より三百山の黄金を
 とりおたるがく一落をも返さば又けるぞ都方の浪人小てま
 を従良し連行人との者あ少しがまのこ太最悲しうて今宵
 樽の大報を敲て廓中をささくせ其方紛小忍ひ出てけ死
 まあで矢あり侍ふる願くは相山ぬく妾を八幡小送るう小滝

君小逢せ玉のを再世の目心ううくと泪と俣小頼とけとを古
 仙人の小美引て然むありの古又うむ太く心を勞めさせそ窮
 鳥懐小入とれた獵士も是を捉はとの殊小医の仁術う薬
 をめて人を救ふ計う小非は何小まは人を救ふを都る医
 の心とは爰をめて一医の意うと古人も教へられたるう吾早速
 小徐とまうて滝君小逢はば旦こまう入来とよとて吾妻を
 伴ひ二三丁をかり歩と行て一軒の舟舎を敲きあうてこの
 家小入ぬけ舟舎の古仙が一族ののめて原末貞底るれ交
 らのうけ少し古仙吾妻が古又をまうく語り今より八幡ま
 で一艘の舟とこのむらうと云々少し主人の心得やがて舟の用意

師之數言下

婦法平切

一夫產取之動

持用